

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	山岡鉄舟劔道悟入の覺書 : 雜録
Author(s)	豊山人
Citation	龍南會雜誌, 56 : 32 - 33
Issue date	1897-05-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4814
Right	

四の書籍によりて其次第を綴りたるなり或は疑ふ人もありて我大八洲國の事はさばかり簡單にと
 きなしながら僅に二三郡の土地にかばかり悉しくときなきは理に當らずやなどいふかり給ふべ
 けれど我大八洲國の事は既に述し如く先進の人のかれこれの説もありて殊更に記すべき値なきに反
 して國引の事は記紀の書にも見えず且は此道に深く志したまへる人の外廣く世に知られざる事
 しあれば淺識の身をも顧みず地理に照して其古傳を學ばんの意に出でたるなり初の單に國引の事
 をのみ述べんと欲せしもかくては狭きに過ぎて國土のなりいでしはじめのすがたを審にし難けれ
 ばとてさてこそかくははからひしなり冗言なれどかくなむ

名玉集に 沼矛垂淤能基呂嶋爾降居神曾父母國乎産禮婆

山岡鉄舟劍道悟入の覺書

左の一編は、郷の中學にある某先生の秘藏にかゝれるもの、寫して久しく篋中に藏したるが、今取り出て、諸兄に分たんとす。中
 外一枚なるには、げにこの辛酸を経ざるべからず、道に志すもの亦坐右の箴さすへきなり。(○點は余が私かに附したるもの、
 願くは其妄を告むる勿れ)

四月念六

豐 山 人

學で不成の理なし、不成は自ら不爲るなり。予九歳にして擊劍に志し、眞影流、久須美自適齋に従ひて
 學ぶ。其後、北辰一刀流、井上清虎の門に入、此道を修行し、諸流の壯士と、試合すること、其數千萬の
 みならず、其中間刻苦精苦する、凡二十年。然ども、一の安心の地に至るを得不得、於是銳意進取して、劍
 道明眼の人を四方に索むるに、未だ曾て其人に遭はず。偶々一刀流、淺利又七郎と云ふものあり、中西

忠太の二男にして、伊藤一刀齋の傳統を續ぎ、上達の人と云ふ、予之を喜び、行而試合を乞ふ、果して世上流行する所の劍術と大に異り、外柔にして内剛也、精神を呼吸に凝し、勝機を未撃に知る、眞に明人の達眼と云べし、是より試合する毎に、遠く不及を知る。淺利氏は明治某年、收術後劍を不取爾來修行不怠と雖、淺利に可勝の方なま、故に日々劍を取て諸人と試合の後、獨り、淺利に對する想をなせば、淺利忽ち劍の前に現れ、山に對するが如し、常に不可當となす、于時明治十三年三月三十日、早天寢處に於て、從前の如く、淺利に對し劍を揮ふの趣を成すと雖、劍前更に淺利の幻身を不見、於是乎眞に無敵の極所を得たり。乃ち淺利氏を招て、我術の試験を受く、淺利曰、大に妙理を得たり、と、遂に我術を開て、無刀流と號すと云。嗚呼諸道の修行も亦如斯耶。古人云、業は勤むるに精し、と、勤むれば必ず至、其極諸學の人請勿怠。明治十三年庚辰六月

擊劍勞心數十年、臨機應變守愈堅、一朝壘壁皆摧破、露影湛如還覺全、

殘 狂 危 言

南 海 生

嘗て郷校にありて修身科の講義に出席す。粗髯先生徐ろに説いて曰く、昔希臘國に『ソクラテス』と云へる賢者ありき。其容貌痴愚なるが如きも、智慮明らかに、識見高く、或は戟を執りて戎軒を事とし、或は雄辯を揮つて時弊を痛論し、俗に染まらず世に阿ねらず、卓行危言、能く哲學上の所信を貫ぬかんとしたるが、國民の惰眠未だ醒めず、天下の迷夢解くに由なく、終に世の猜忌を被ひり、冤罪に陥りて、死刑を受くるに至れり。彼れ死境に至ると雖も從容追まらずして哲學上の談話を爲なし、靜かに